

<牧会ミニ通信>No.25

2020. 10. 25.

「人生の秋は何と素晴らしいのでしょうか」一、これはドイツの神父の言葉です。実に、印象深い言葉です。人生の午後は、午前よりも意義深いということなのでしょう。

最晩年を迎えています。なお、みごとな紅葉の残照なる照り映えが見えているとは言いがたく、むしろ、以前にも増して、大儀で困難な時期をむかえているという実感があります。

人生の午前と比べると、人生の午後は、急な下り坂を下っているとの思いがあります。

自然の理に逆らって生きることは、誰もできません。老いは容赦なく進みます。諸機能はドンドンと低下します。しかも、時に、人生の午前の時を振りかえると、反省と悔恨との痛みに襲われます。

たとえば、老いて周囲の者から忘れ去られることありしも、なお、あるがままの気概と覚悟とを抱き、人生の晩節を安んじて、こころ静かに神を賛美して生きるものでありたいと願わされています。

晩節を迎えた頃と思われる使徒パウロの信仰に生きた言葉が残されています。

「わたしたちの住んでいる地上の幕屋がこわれると、神からいただく建物、すなわち天にある、人の手によらない永遠の家が備えてあることを、わたしたちは知っている。そして、天から賜わるそのすみかを、上に着ようと切に望みながら、この幕屋の中で苦しみもだえている。

それを着たなら、裸のままではいけないことになろう。この幕屋の中にいるわたしたちは、重荷を負って苦しみもだえている。それを脱ごうと願うからではなく、その上に着ようと願うからであり、それによって、死ぬべきものがいのちにのまれてしまうためである。わたしたちを、この事にかなう者にして下さったのは、神である。そして、神はその保証として御霊をわたしたちに賜ったのである。

だから、わたしたちはいつも心強い」(②コリント5：2-6)。

周東のぞみキリスト教会：牧師 結城 晋次

